〈さまざまな人生〉⑦

ロマンス

岡崎英生

夜の八時頃、村の道に人通りが途絶えて間もなく、火の見櫓の下のあたりから、カラコロカラコロ、下駄の音が聞こえる。

別に急ぐでもなく、かといってわざとのんびり構えているのでもないその下駄の音は、次第に近づいて来て、やがてぼくの家の前を過ぎ、智積院という真言宗のお寺の前で玉砂利を踏む音に変る。

善蔵さんの下駄の音、といって、それはぼくが子供の頃、ぼくが生まれた東北の片田舎の村で、ひとしきり話題になった下駄の音だった。

その下駄の音が響きはじめると、家の大人たちは、

「また善蔵が来た」

とか、

「善蔵さんだ」

といって、何ともいえない不思議な笑顔になるのだった。

村の道に善蔵さんの下駄の音が再び聞えだすのは、九時半か十時頃のことである。

ぼくはそれを蒲団の中で夢うつつのうちに聞くこともあれば、聞く前に眠りに就いてしまうこともあった。

善蔵さんの歩きぶりは、来るときとまったく変らない。別に急ぐでもなく、かといってわざとのんびり構えて歩くわけでもない例の歩きぶりで、カラコロカラコロ、いつものどかな下駄の音を響かせて帰って行った。

空気がぴんと澄みきって物音がよく響く寒い冬の晩などは、善蔵さんがお千代さんの家の戸の開けて外へ出るところから聞えはじめるようだった。

まず、カラカラカラと、お寺の門前に住む中年の未亡人であるところの、お千代さんの家の戸が開く音がして、何か二言三言、話し声が聞える。

ギシッ、ギシッと玉砂利を踏みしめて、善蔵さんは歩き出す。

その音が、善蔵さんが村の道に出たところで不意に、カラコロカラコロ、甲高く、のどかな下駄の音に変るときは、聞いていて、何か痛快な感じがしたものだ。

下駄の音は再びぼくの家の前を通り過ぎ、火の見櫓の下で善蔵さんが右へ曲るのがわかり、かすかに、今度は善蔵さんの家の戸が開く音がして、やがてすべての物音がやむ。

村の道はまた元のようにしんと静まりかえる。梟が鳴きだしたり、智積院の方面に怪しい物音が聞えはじめたりするのは、それからずいぶん後のことだった。

お千代さんは智積院の参道の横に、嫁入り前の娘と、高校生の息子と三人で暮していた。丸顔の、色の白い人だった。

お千代さんは未亡人だったと先に書いたが、正確にいうと、その頃お千代さんが未亡人であるかどうかは、まだはっきりしたことではなかったのである。

お千代さんの御主人は、戦争に行ったまま生死不明になっていた。お千代さんがまた舞鶴へ行くそうだ、というような話を、ぼくはたびたび耳にはさんだ。舞鶴というのは、古い人なら誰でも知っているが、戦後幾度か、中国から帰還する人々を乗せて興安丸という船が着いた港である。

しかしあれから三十年近く経った今でも、お千代さんの御主人が帰って来たという話は聞かない。やっぱり、あの頃すでにお千代さんは未亡人になっていたのだと思われる。

お千代さんと善蔵さんの仲がはじまったのは、いつ頃からのことだったのか。

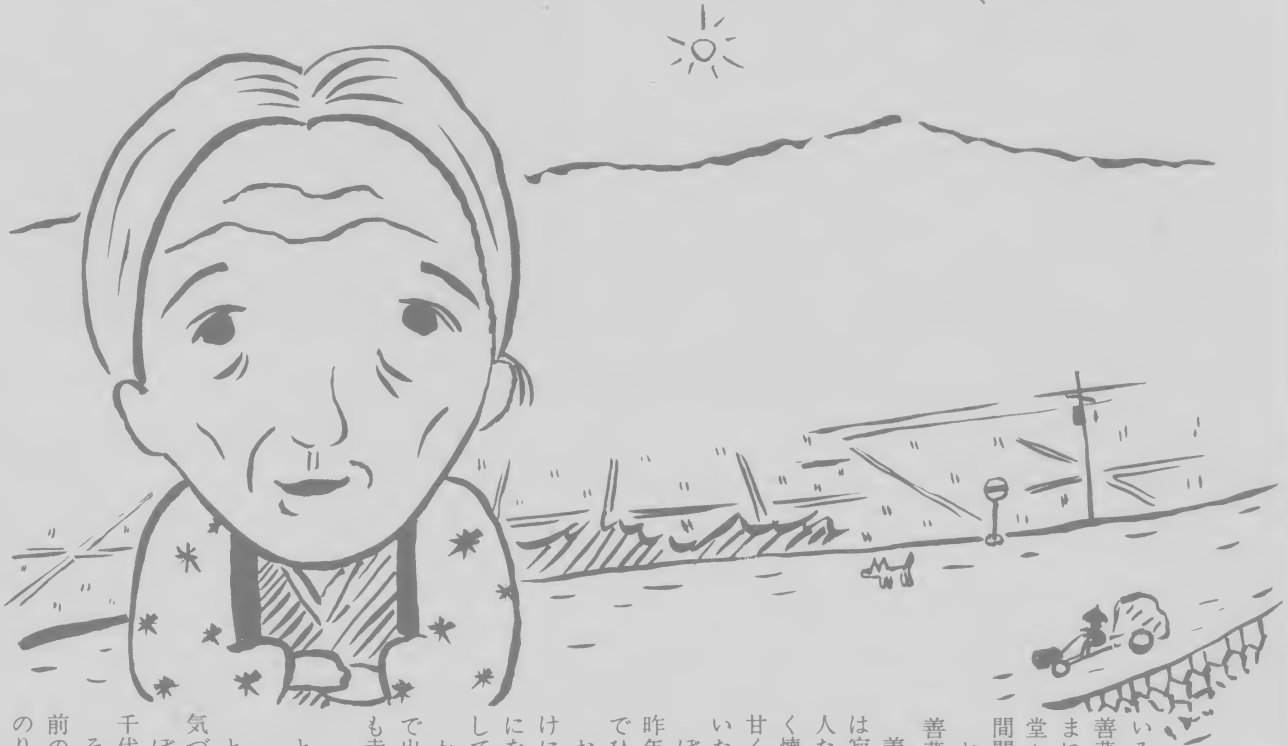
最初は、田んぼが少なく、生活の苦しいお千代さんを、物持ちの善蔵さんが援助するというような形ではじまったのだったかもしれない。

そういうことを含めて、村の大人たちは二人についてさまざまな噂をし合ったが、それでも全体としては、二人の仲を許容し、受け入れている、というようなところがあった。

善蔵さんの奥さんに同情する意見もないではなかったが、それは決して、すぐには善蔵さんとお千代さんに対する非難にはつながらなかった。誰もが、お千代さんが生きるために誰かに縋るのは仕方のないことだと思っていた。ただ村の大人たちは、二人の関係を認めるかわりに、彼らの噂をして、それを楽しみの少い自分たちのささやかな楽しみとする権利だけは、しっかりと留保していたのである。

来る日も来る日も、村の道に善蔵さんの下駄の音が響いた。善蔵さんは一日もやすまなかった。しかも善蔵さんは時間に非常に正確な人で、火の見櫓の下に下駄の音が聞えはじめるのは必ず八時過ぎにきまっていた。

時には何かに熱中して時間を忘れている。善蔵さんの下駄の音を聞いて時計を見上げ、ああやっぱり八時だと思う。そんなことが何度もあった。

善蔵さんは、自分の下駄の音が有名になっていることをよく知っていたはずである。しかし、善蔵さんの歩き方はちっとも変らなかった。たまに昼間、道で出会う善蔵さんも、胸をはって堂々と歩いていた。善蔵さんの下駄の音は、昼間聞いても、実にいい音だった。

お千代さんとの仲がはじまって二、三年後、善蔵さんは脳溢血で倒れ、間もなくして死んだ。

善蔵さんの下駄の音が聞えなくなった村の道は寂しかった。あの頃、子供のぼくも、村の大人たちもまた、善蔵さんの下駄の音を何か、古く懐かしい愛の旋律(ロマンス)の一節のように、あるいは甘く孤独な物思いに誘う小夜曲(セレナーデ)のように聞いていたのだ、と思う。

ぼくが善蔵さんの下駄の音を思い出したのは、昨年の夏、やむを得ぬ事情があって生まれ故郷でひと月あまりを暮したときのことである。

お千代さんはあいかわらず色が白く、それだけに田舎にはめずらしい可愛らしいおばあさんになって、息子たち夫婦とお寺の門前の家に暮していた。

かつて、善蔵さんの下駄の音が響いた村の道で出会ったお千代ばあさんは、昔と違ってとても幸福そうだった。

「こんにちは」

と、ぼくがいうと、お千代ばあさんも、

「こんにちは」

といい、それから初めてぼくが誰であるかに気づき、大きな身振りで驚いてみせた。

ぼくたちはそれから少し、立ち話をした。お千代ばあさんはニコニコと笑った。

その色白のお千代ばあさんの顔には、三十年前のロマンスを偲ばせるかすかな色気が、ほんのりと消え残っていた。

手のうちはいつもフルハウス　●久保田二郎

世紀のエンターテイナー、必殺のエピキュリアン、虚実皮膜のさすらい人、幻の仕掛け人など数々の異名を持つ久保田二郎の待望の新刊、ついに刊行！『極楽島ただいま満員』『ああパーティの夜はふけて』（晶文社）に次ぐ著者入魂のこの一冊は、「これぞ天下の稀書」「ああ永遠の傑作本」「ひとしく万人のための人生の本」とまで謳われた前著書をしのぐ、堂々の超娯楽本だ。
装幀・イラストレーション＝矢吹申彦
980円

十二人の猫たち　●白石冬美

愛くるしい猫、さみしげな猫、いたずら猫、気品ある猫、迷い猫、恋する猫、猫かぶりの猫、居直った猫、そして十二匹の猫の紳士、淑女のお話。
装幀＝和田誠
950円

中山千夏の本

中国ノート　980円
恋あいうえお　880円

話の特集の新刊

4

ジック出版局
東京都新宿区揚場町15セントラルコーポ207　電話03(268)6312

特集●ほとんど総ての人のための
カール・マルクス君入門
教養主義よ、さようなら。流行遅れのテーマに果敢に挑戦！　人間マルクスを同世代の視点からとらえ直し、生き方としてのカール・マルクス像の核心に迫るヴィヴィッドな記事を満載！

辞書操縦法　英語・国語辞書の選び方と活用法

3月10日発売　480円

まんが専門誌
ぱふ

バイトくん②
東淀川ひん民共和国
いしいひさいち

これを快挙といわずして
何といおう
遂に第2集刊行！

¥500（送料¥160）
好評発売中!!

プレイガイドジャーナル
〒542 大阪市南区西清水町34 江川直ビル3F
☎06-251-9251/6458　振替＝大阪21561